沖縄の印象

牛島義友

前書き――お茶の水女子大学教授牛島義友氏は今夏、月余に亘り沖縄に招かれて教育心理学の講習に赴かれた。現下日本にとつて関心の大きい彼の島の現状は、われらのくわしく知りたいことである。特に執筆を乞うた。（編者集部）

はじめに

沖縄といえば亞熱帯に近い島、しかも多くの孤島からなり、颱風に絶えずおびやかされている風土が想起されよう。しかしこの土地に住む人の問題はこの風土性よりも、その歴史性に根ざすところが多いようである。

沖縄では「運命の島」という言葉が使われるが、この土地は歴史的に政治的にいたましい運命の下に置かれた処である。過去においては支那と日本の二大国に朝貢して辛じて独立を維持し島津藩からは貿易の基地として利用されていた。国内では群雄割拠の戦国時代、尚王に統合された後は、武器を放棄した平和の地とはなつたが、有能な政治家に弄弄されて、人頭税による苛斂誅求或は武士階級の百姓への圧迫と強大な力で絶えず抑えつけられながら生きて来た人々である。沖縄県となつて日本と文化を分け合つたのもつかの間で、帝国主義の最大の犠牲を払つたのはこの土地である。苛烈な近代戦の戦場となつたために、一木、一草に至るまで焼き払われ、昔のままの風物は海の色だけだと評される程の戦禍を受けた。而も今日講和によつて日本の独立が認められようとしているとき、沖縄は信託統治の名の下に土地のみならず住人の生活まで日本から切り離されようとしている。この土地に今日未だかつて一度も完全に明るい日はめぐつて来なかつた。まさに運命の島、忘れられた孤島である。この歴史性に基づいて沖縄の社会や人の問題を考えてみなければならない。

戦禍の姿

私は戦前の沖縄を知らない。したが

つて今度の戦禍がいかに悲惨を極めたものであるかはピンと来なかつた。港が狭いので入港できず、一日港外に停泊させられたが、その時の沖縄の夕景夜景は美しいものであつた。さんご礁のために海は琥珀、エメラルド、碧玉と宝石を溶かしたような色調であり、雲の形と色あいも亦平坦な島影を多彩に色どつている。夜は軍施設場を照らす皓々たる電燈の光はイリュミネイションのように美しかつた。しかし一歩上陸すると一切が破壊と建設の混じた街である。かつて美女三千人をようしていたといわれる有名な遊里「辻」は荒涼たる焼野と化してをりその裏にあつた宏大な墓地すら目下取壊されつつある。私は沖縄にある昔ながらのものは墓だけであろうという印象を持つていたが、その墓さえ安住し得ないのである。

昔の那覇市は今日軍用地として物資の集積所等と化し、今日の那覇市はかつての郊外に作られている。私の泊つたホテルの前や横も墓で取まかれているような有様である。昔を知つている人は、どうしても今日の街が以前はどこであつたか見当がつかないそうである。

この新市街には原始から文明までの様々の建物が見られる。元来沖縄の民家という民家は戦争で破壊され、残つた民家も戦後に焼きはらわれた。従て終戦直後は五坪の規格住宅を急造してやつと人々を落付かせたと言う。カヤ葺の五坪の堀立小屋。今日首里市にはこれが多いが、丘の上からの景貌はまさに南洋の原住民の部落さながらである。闇市やマーケットで金をもうけた人はこの規格住宅を拡張してトタン葺にかえ、更に昔通りの赤と白の縞の琉球瓦の屋根の本建築を復興させたものもある。更に近代的石造の大映画館も数個建築されつつある。この復興の姿に対し、或人は極めて低調だと評し、他の人は意外に復興がみごとだと言う。完全な無から出発したものとしてはよい方かもしれない。とに角この地ではこゝ数年間に、原始時代から文化時代までを圧縮した形で通過した。

しかし戦禍として最も悲惨を極めたのは島南端の戦跡である。激戦苦闘というよりも、莫大な近代武器に追詰められて一歩一歩と後退し、最後に取囲まれた地域は猫頭大の平地である。女子師範生が惨死したという姫百合の塔の場所は遮蔽物など何もない草原である。以前は樹木が茂つていたのであろうが、勿論たよりになるものでない。幸にさんご礁島であるためにこの地にも地下に自然の洞窟がたくさんあつた。すなわち追いつめられた人々の避難所はこの自然壕と、祖先の作つておいてくれた墓であつた。

無名戦士の墓である魂魄の塔のある場所は島の最尖端であり、牛島中将の自刃した最後の司命部摩文仁岳は山ではなくて、海岸に面した絶壁に他ならない。この、これ以上進めば海中に落ちるよりほかない点まで追つめられ

て、何万と言う人々が死んでいつたのである。

この沖縄の悲劇について一つの精神医学的問題がある。即ちこれほどまでの悲惨事に直面し、そのなかに夫や妻や子を失つた沖縄の人々が今日精神的に健在であることが、世紀の大きな奇蹟と考えられつつある。若しアメリカ人がかかるショックを受けたならば多数の者が発狂したにちがいないのに、沖縄の人の中には精神病になつた者が非常に少く、精神安定度が高い事実が、戦後沖縄に来た米軍の精神医学者の注意を惹いたのである。之に対して彼等は近代の精神分析派の立場から一つの解決をしている。即ち沖縄の人間の精神安定度が高いのは、沖縄の子供に対する育児法が原因なのでないか。子供を絶えず愛撫し、殆ど叱るということをしない沖縄の母親の膝下で、幼児たちは安定感のある情緒生活を送りそれが其後の性格形成に役立つたのであろうと解釈している。それで、之を沖縄のレッスン（Lesson of Okinawa）として、現代育児法の反省としている。

歸属問題

横浜を出発して八日目にやつと二十九度線を突破して奄美大島の名瀬の港についた。六ケ年間固く閉されたカーテンをくぐつたのであるから、何かエキゾティクな風物もがなと好奇の眼を以て上陸した。しかしこの土地の教員たちとの会合で第一に受けた言葉は「日本と異つた点がどこかにありますか」と言うきつ間であつた。そう言えば、家屋の構造で日本内地と同様であり、服装も日本と完全に同じもので日やけの程度も吾々と余り差はない。或人は伊豆の港と感じがすつかり同じであると言つたが、空襲で破壊され、復興の極めて遅々たる姿をみては私は平和な伊豆を連想することはできなかつた。粗末なバラックに少しばかりの商品をならべた疲弊し切つた名瀬市に日本の極く田舎町を連想するだけである。先生方は重ねて言はれる。「どこも日本と異つてはいないでしよう。それなのにどうして吾々だけが日本から切り離され、戦争の犠牲を一人で負ひこまねばならないのか」と、早くも語調は緊張してくる。更に「土地は占領

することはできても人間は占領することはできない」との激しい言葉も聞いた。この地では日本への復帰を切願し島民の九十九%は日本復帰の署名をしている。之に反対するのは僅か二十数名だけであると、その氏名をあげることができる位に、殆ど島の全部の者は日本への復帰を希い、このために猛烈な街頭デモもやり、断食運動をしている。船に臨検に来た警察官も、自分も既に何日か断食していると言つていた。

この土地は早くから島津藩の一部であり、鹿児島県の一郡であり、教師たちは鹿児島師範の出身者である。その過剰の人口の大部分は日本に渡航して生活していた。今日島内二十二万に対し島外(日本在住)に十八万の大島々民がいる。ここからは法曹界に人材を輩出している。島民の精神生活は完全に日本的であり、彼等の心は北の方にのみ向つていた。ところが今日では、この北への道がふさがれてしまつた。僅な黒糖と大島油では経済的自給はできない。その上、ここでは仂きたくとも仕事はなく、官吏や教師なども薄給に喘いでいる。沖縄では教員の給与ベースが三千七百円(沖縄軍票一円は日本の三円に当る)になつたと言うのに、大島では何とかして二千円にこぎつけようとして猛運動をしていた。尚今日琉球には四つの独立政府があつて、統一政府は未だ確立していない。そのために、教員の給与も各島まちまちである。物価は決して安くはない。日本の商品が大部分であるが、勿論日本におけるよりも高価である。この経済的苦境のために学校では五日制が採用されている。それは五日制の方が教育に好ましいとの結論からではなく、土日二日他の仕事で仂かねば食つていけないからなのである。教師の中にはこの二日を沖の荷役をして日給七十円の労役で生活している人もあるとの悲惨な実状である。島で喰へない若者たちは沖縄へと流れていくが、ここでも人口は過剰でよい仕事が待つているわけではない。自然下積の仕事にまわされる。沖縄のパンパンの大部分は大島出身の女であり、犯罪者の中にも大島出身者が高率であると新聞でたたかれている。この状態を見れば大島の真剣な日本復帰の要求が理解されるであろう。精神問題と経済問題の双方から、大島は日本帰属以外に生きる道はないのである。まことに余りにもいたましい。その民謡を聞いても、哀調を帯びてをり、しかも八重山のような優美さはなく、激しい調子であつて、男性の悲痛なうめきを想はせる。

沖縄群島に行くと、流石に島地が大きく、経済力もあり、文化的にも異質的な独特の琉球文化を持つているし、又ここでは巨大な軍作業の恩恵(?)を受けているので相当のドルを持つているものも多く、又直接軍との接触が大きいから、経済的には日本に帰属した方が有利であるかどうかと判断のできない者もいたりする。貧乏な日本につくよりも、アメリカの世話になつた

方が沖縄のために幸福であろうなどと考える者もいた。しかし之は余りに物質的一方の考え方で血のつながり、精神の問題を忘れたことであることを、私は沖縄に渡つてから強く実感した。この地でも七割余の人々が日本帰属に署名している。しかし残りの三割の人の心を吾々は考えねばならないであろう。島津は琉球に何をなしたか、沖縄県になつてから日本はどれだけの施策を行つたかが今日厳しく批判されている。そこでアメリカに属したいというよりも琉球王国の復活を夢見る老年たちもあつたりする。臨時中央政府の比嘉主席はアメリカに渡つて、「沖縄人の大部分は信託統治を認めているが、できるだけ早く日本に復帰したい」とあいまいな外交辞令を使つた。そこでこれに対し、A新聞は「沖縄は信託統治を認める」との見出しの下に、この記事を掲げB新聞は「沖縄は日本帰属を望んでいる」との見出の下に同一記事を掲げて論争をしていた。しかし島民の大部分特に青年層と教員群は熱心に日本帰属を主張している。又軍作業従事者もアメリカ人やフィリツピン人に比して給与が余りに劣るために心よく思つていない。（島民は前者の十分の一、後者の五、六分の一の給与しか受けない。時間給であるが、下級作業者は一ケ月約三千円位の収入）

しかしなお注意しなければならない点は、日本への帰属を切望し、日本への郷愁を強く懐いている人々は、今までの生活原理で日本人として教育され軍の指導下に自決した、あの精神を慕つているのである。自分たちが凡てを捧げたあの日本から切り離されたくないとの願いなのである。ここでは日本への郷土愛、愛国心が純粋に持ちつづけられている。之に対して今日の日本はこの人々の期待に添い得るであろうか。彼の地の教師は日本の教育について、飢えかわいた者のように吸収しようとしている。しかも最近はるばる日本に視察に来た或教師は、日本の新教育の技術は進歩しているが、その精神には失望したと嘆じられていた。こうなると帰属問題は沖縄の問題だけでなく、日本自身の問題でもある。沖縄への主張をする前に自らを反省する必要がある。

教育問題

沖縄県は戦前は教育県として名をなし、東京府の教員の中、他府県から奉職している者の中では第四位を占めていたという。この地の有為の青年は師範学校に進学し、教師の中から、今日沖縄の政治界、実業界の有力者となつている者も多い。又一般の父兄も子弟の教育には熱心であり、家庭に余裕があつてというよりも、田畠を売つても子弟の教育をするという傾向があつた。この傾向は今日も尚同様で、高校生の大学進学熱も高い。

ところがこの沖縄の教育は戦争によつて物的に破壊され、教育内容に至つては五里霧中の中に彷徨していた。今

日尚天幕張の校舎や、かやぶきの堀立小屋の学校が那覇市のまん中にすらある。従つて今日の教育問題の第一は校舎問題とされておる。（その復興のためには軍政府から非常な援助を受けている）校舎がこんな調子であるから設備や教具などは皆無と言つてもよい。教科書は日本の教科書が数年前から生徒に貸与されるという形で使用されている。

教育の指導原理に関してはアメリカからの強い指導は余り気がつかなかつた。初めの頃は日本をおう歌する教材を使用してはならないと言われたが今日では日本の新教科書はそのまま採用することが許され、日本の指導要領に従つて授業されている。教育制度は六三制が採用され、凡て日本の方式にならつて行われている。しかも各群島政府によつてそれ〴〵若干相違し、沖縄群島では小学校で英語を教授しているが、八重山群島ではその必要なしと民政本部から指示されている。或は八重山では高等学校は男女共学であるが、宮古群島では女子高等学校が現存している。このように教育政策に関してはアメリカ側は余り強い指導や干渉は行わず、むしろ放任と言うか、島民に大幅の自治を許している感がある。このために沖縄の教育界は日本側の指導を渇望してをり、日本の情勢を知ろうと必死になつている。大島では教員を日本に密航させて日本の新教育を学んだものもあると言われ、八重山群島では石垣島の測候師が終戦後も日本の管理下にあつたために、ここに来る日本の船に通じて、日本の書籍や教育雑誌を入手していたとも聞いた。したがつて現在では八雲山群島が一番教育が復興し、新教育の方式を早く採用している。例えば生徒指導要録を三年前から採用しているが、沖縄群島では今年からやつと採用する様になつた。一般に日本の図書が入手出来るようになつたのは一年来のことで、それ以前は全然日本の様子が判らず、それだけに、自分たちの立遅れていることに対し激しい焦燥が感じられていた。こういう訳で私は終戦後最初に渡航した指導者であると言うので非常な期待と心からの歓迎を受けた。殊に通訳を通さないで聞ける話ということが先づ何よりも歓迎され、又講師と聴衆との間に初めて心からの共感を感じることが出来たとも言われた。後で土地の先生から教えられた事であるが、アメリカの講師が話す場合には聴衆は煙草をふかし乍ら聞く習慣があつたが、私の講習の間は煙草をふかす者がなく、非常な緊張と感激を以て日本の指導者の話に聴きいつたとも言つていた。

私は先づ琉球大学の講堂で、予め選抜された約五百名の教員に五日間教育評価の話をしたが、この技術的な問題について熱心に聞き、聴衆は後になる程増加した程であつた。私への初めの注文は教育評価であつたができるだけ脱線して沖縄の教育の問題を心理的に考察して話したが、私の期待以上に大

きな影響を与えて恐縮している。之はまさに最初の来島講師であつたためであり、彼地の教員諸君が日本の指導を待望している反映でもあろう。

沖縄の学生たちも日本への留学を心から望んでいる。今日米国にも日本にも留学できる途が少し開けているが、彼等はアメリカよりも日本に行きたいと言つている。アメリカへ一年行くより、日本に数年学んで知識や技術を身につけなければものにならないと考えている。沖縄ではアメリカ帰りよりも日本帰りの方が幅がきくとも言われている。或八重山の高校生たちは自費留学でよいから日本への進学の門戸を拓いてくれと切望した。しかし日本に渡航するには日本の大学の入学許可証明が必要であるから、沖縄で試験をしてくれない限り進学の路は無いのである。この点を解決することは目下の要望である。

先年のクリスマスに沖縄の小学生たちはアメリカから沢山の菓子をもらい大喜びであつたが、その感想文に、こんなおいしいお菓子を沢山もらつて大変嬉しかつたが、「しかしこれが日本からのお菓子だつたらなあ」と、附言した子があつたという。子供たちにまで、こんなに日本を慕ふ切ない願いがあるのである。

読者はこれで沖縄の教育の方向は理解されたことと思う。しかし極幼少な子供は今後どう伸びるであろうか。宮古の小学校で夏休の製作品を見たが、皆仲々よいものを作り、特に教材に直ぐ使用出来る程の地図や社会科の掛図には感心したが、その中で小学一年生の作品中に粘土製の立派な船があつた。ところがその船につけられた旗は星条旗であつた。信託統治が長引けば次々代の沖縄人の考え方は今日とは大いにちがつて来るだろうことも併せ考えねばならないことであろう。

（四八頁より）

水と一緒に空気を入れないことがコツ。水も袋一杯に入れない。氷は細かく砕いた方が病人には楽である。

枕は布でくるみ、ゴムが直接に触れない様に。口金は返す返すよくみておかないと、蒲団をぬらしてしまう。

(f) ゆたんぽ

容器に入れたまゝわかすときは、必ず栓をとつておく。必ず体から三尺は離して入れ、火傷させぬ様に。勿論栓には慎重な注意がいる。

(g) 懐ろ

火傷をさせぬ注意。

(h) 吸入

蒸気の出る穴がつまつていないか、よくしらべてから組立てる。

蒸気が出て来ると、最初に熱い湯の玉が飛び出すから、患者の顔からそむけておき、安全になつてからあてがう。

ふとんがしめらぬ様、油紙とタオルを充分に用いる。

あとに顔の荒れを招かぬ様に、クリームを塗つておく。

（以下次號）